

2021年度

国際ユース作文コンテスト上位入賞作品

令和3年10月31日

公益財団法人 五井平和財団

2021 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

テ ー マ：「いのちって何？」

参加国数：161 カ国

応募総数：合計 28,217 作品（子どもの部 7,670 作品、若者の部 20,547 作品）

※学校名、年齢等の受賞者情報は、募集締切日（2021 年 6 月 15 日）時点のもの

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 「最後に残るのは命」
ビバーン・カトゥリア（インド）9 歳

<若者の部>

- 「大地からの教え：命とは何か、どう生きるべきか」
ハー・ビック・ドン（ベトナム<カナダ在住>）24 歳

優秀賞（各 3 点）

<子どもの部>

- 「命とは本当の幸せ」
チツラ・カルナ（マレーシア）8 歳
- 「命ってなに？」
中山 諒也（兵庫県）12 歳
- 「一人ひとりがモザイクのピースに」
クララ・シマ・アガラジー（カナダ）14 歳

<若者の部>

- 「真の生命科学」
フーティアン・シュー（米国）16 歳
- 「いのちをつくるものとは」
長谷川 彩華（東京都）17 歳
- 「贈り物」
ラウラ・シルバ・ベルトキ（ブラジル）19 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 「まぶしいほどの光」
塚本 光（千葉県）11 歳
- 「命の炎」
ララ・スタンチェバ（北マケドニア）11 歳
- 「おばあちゃんの命」
湯本 梨里愛（茨城県）12 歳
- 「いのちって何？」
サイシャ・マヤ・タッポウ（フィジー）12 歳
- 「与えるために生きる」
マハシュリ・ランジット・クマール（インド）13 歳

<若者の部>

- 「いのちって何？」
二反田 優（鹿児島県）16 歳
- 「イモムシの変容」
ダン・ジョセフ・タレ・ディオ（フィリピン）17 歳
- 「いのちって何？」
ネティミ・イシャーラ・フェルナンド（スリランカ）18 歳
- 「幸せな最期のために」
プリンス・ピショゴ・バシャンゲジ
（コンゴ民主共和国<エスワティニ在住>）20 歳
- 「生きること」
テシル・プジメル・ジヌ
（アラブ首長国連邦<インド在住>）21 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- マリア・チェルヌッチ（ロシア）10 歳
- 永田 さな（鹿児島県）10 歳
- 塚原 碧衣（茨城県）12 歳
- ファティマス・サーラ・ナゼール（モルディブ）12 歳
- グレース・マシューズ（インド）12 歳
- 平山 陽向（愛知県）12 歳
- パリディ・バーマ（インド）12 歳
- 和田 璃紅（静岡県）12 歳
- アーメド・ムハナド・マディ（イラク）13 歳
- 本石 心（京都府）13 歳
- オデイ・ビクトリア・オグウィヒ（ナイジェリア）13 歳
- 進藤 璃子（東京都）13 歳
- 二村 葵（静岡県）14 歳
- オーブリー・ジョエル・ジャクソン（米国）14 歳
- セリーヌ・ルーン（米国）14 歳
- デビッド・オルワトビ・オラデジョ（ナイジェリア）14 歳
- ハルピタ・パンディアン（インド）14 歳
- 望月 かれん（東京都）14 歳
- 平野 このは（静岡県）14 歳
- メンディガズ・ゼイノーラ（カザフスタン）14 歳
- オゼロバ・ダイアナ・ビクトロヴナ（ベラルーシ）14 歳
- パンタラック・ナットニチカラット（タイ）14 歳
- ベネチア・メンデス・チャバリア（メキシコ）14 歳
- 的場 由晏（東京都）14 歳
- 石川 結子（東京都）14 歳

<若者の部>

- アンナ・アンドレーブナ・ストピラ（キプロス）15 歳
- マイ・ジャハド・シャアバン（シリア）15 歳
- セタ 菜々子（鹿児島県）15 歳
- 岸岡 弘奈（埼玉県）16 歳
- モハメッド・ルース・イブラヒム・ジヤウ（モルディブ）16 歳
- ワリド・モハメド・ラクダリ（モロッコ）16 歳
- ホー・チョウ・ザン（ベトナム）17 歳
- イシャン・パンディ（インド）17 歳
- タニシカ・ムルティ（インド<大阪府在住>）17 歳
- チアラ・ジョー・マリ・ガラン・シメニ（フィリピン）19 歳
- エミリアーノ・レンテリア・ベニテス（メキシコ）19 歳
- 西尾 敬太（愛知県）19 歳
- パール・チェン（オーストラリア）19 歳
- ダンナ・ガブリエラ・キンテロ・クリスタンチョ（コロンビア）20 歳
- ファルハン・アフメッド（パキスタン）20 歳
- カロリーナ・フェドロヴィッチ（ポーランド）20 歳
- スワスティカ（インド）20 歳
- レタ・ダニエル（ウガンダ）21 歳
- マリーナ・プラタ（ブラジル）21 歳
- メガリ・バネルジー（インド）21 歳
- ナダ・ユセフ・カシュキシュ（パレスチナ）21 歳
- ウミダ・ザイニッディノブナ・エシルガポバ（ウズベキスタン）21 歳
- イシアナ・アガリユー（アルバニア）21 歳
- S・プリヤシニ（シンガポール）23 歳
- ラヒヤラ・クリスティーナ・オリベイラ（ブラジル）25 歳

学校特別賞（3 校）

- 鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校（鹿児島県）
- 不二聖心女子学院中学校（静岡県）
- 常総学院中学校・高等学校（茨城県）

学校奨励賞（66 校）

- イジャイエ・ハウジング・エステート・シニア・グラ
マースクール・アラカシ校（ナイジェリア・ラゴス州）
- 中部テネシー日本語補習校（米国テネシー州）
- 東京学芸大学附属世田谷中学校（東京都）
- イスカンダル・スクール（モルディブ・マレ市）
- 東京都立杉並総合高等学校（東京都）

- 板橋区立緑小学校（東京都）
- 茨城県立古河中等教育学校（茨城県）
- SMK ジェンジャロム（マレーシア・セランゴール州）
- FPT 大学（ベトナム）
- 大田区立大森第六中学校（東京都）
- 大牟田市立大正小学校（福岡県）
- 沖縄県立具志川高等学校（沖縄県）
- 科学・芸術国際総合学校（パキスタン・パンジャブ州）
- 吉華国民型華文中学（マレーシア・ケダ州）
- ギヤサディン・インターナショナル・スクール
（モルディブ・マレ市）
- 京都先端科学大学附属中学校高等学校（京都府）
- 居林覚民中学（マレーシア・ケダ州）
- グアダラハラ大学附属第 8 高等学校（メキシコ）
- グアダラハラ大学附属第 11 高等学校（メキシコ）
- 晃華学園中学校高等学校（東京都）
- 公民国民型華文小学（マレーシア・ペナン州）
- コレジオ・ギルヘルム・デュモン・ピラレス
（ブラジル・サンパウロ州）
- コレジオ・ピタル・ブラジル（ブラジル・サンパウロ州）
- コンテンポラリー・サイエンス・アナトリア科学
高等学校（トルコ・ムーラ県）
- コロトラン地域高等学校（メキシコ・ハリスコ州）
- サトリウィタヤ学校（タイ・バンコク都）
- サント・トマス小学校分校（フィリピン・ラグナ州）
- シカゴ双葉会日本語学校補習校（米国イリノイ州）
- シドニー日本語土曜学校
（オーストラリア・ニューサウスウェールズ州）
- 城南学園中学校・高等学校（大阪府）
- 昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校（東京都）
- ジョジナ第 6 中学校（ベラルーシ・ジョジナ市）
- 須磨学園中学校（兵庫県）
- スリ・ニパー国民中等学校（マレーシア・クランタン州）
- セント・ジョージズ・スクール
（ブルネイ・ブルネイ・ムアラ地区）
- 第 11 学校（ウクライナ・チェルカッシー州）
- 第 7 コペルニク高等学校（ポーランド・シロンスク県）
- 玉名女子高等学校（熊本県）
- 東洋英和女学院 高等部（東京都）
- ドゥルゲル・セントラル・スクール（ブータン・パロ市）
- ナンヒ・ドゥーニャ
（インド・ウッタラーカンド州デーラードゥーン市）
- ニュートン・グローバル・スクール（マレーシア・サラワク州）
- 延岡工業高等学校（宮崎県）
- フィリピン・ガールスカウト（フィリピン・マニラ市）
- フィリピン科学高等学校セントラル・ルソン校
（フィリピン・ラナオデルノルテ州）
- ビーコンハウス・スリ・イナイ・インターナショナルスクール
（マレーシア・プタリン・ジャヤ市）
- 福岡工業大学附属城東高等学校（福岡県）
- ブッカーズ・インターナショナル・スクールズ
（ナイジェリア・オグン州）
- ブハラ地域カラブルバザール地区第 1 学校
（ウズベキスタン・ブハラ州）
- プレスト第 1 学校（ベラルーシ・プレスト市）
- 平安女学院中学・高等学校（京都府）
- PECHS 女子校（パキスタン・カラチ市）
- 本庄東高等学校（埼玉県）
- マインデンハイト高等学校（マレーシア・ペナン州）
- マインドラブ・インターナショナル・インスティテュート
（マレーシア・クアラルンプール市）
- マタイアス・ハマー高等学校アニナ校
（ルーマニア・カラシュ＝セベリン県）
- 松本秀峰中等教育学校（長野県）
- 三島学園知徳高等学校（静岡県）
- ミラノ・インターナショナルスクール（イタリア）
- 武庫川女子大学附属中学校・高等学校（兵庫県）
- 八千代市立大和田南小学校（千葉県）
- 山ノ内町立山ノ内中学校（長野県）
- ヤロスラブリ産業経済大学（ロシア）
- ラオ＝アメリカン大学（ラオス）
- ラブアン・インターナショナル・スクール
（マレーシア連邦領ラブアン島）
- ロザリオ・シスター・スクール／マルジュアルハمام校
（ヨルダン・アンマン市）

国際ユース作文コンテスト選考委員（＊敬称略・50音順）

委員長	千 玄 室	茶道裏千家前家元、ユネスコ親善大使
	西園寺昌美	公益財団法人 五井平和財団会長
	都倉 俊一	作曲家
	成田 純治	株式会社博報堂相談役
	服部 真二	セイコーホールディングス株式会社代表取締役会長兼グループ CEO 兼グループCCO
	松浦晃一郎	一般社団法人 アフリカ協会会長、元ユネスコ事務局長
	美内すずえ	漫画家
	矢崎 和彦	株式会社フェリシモ代表取締役社長
	葉 祥 明	絵本作家

主 催	公益財団法人 五井平和財団
後 援	文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、日本私立中学高等学校連合会、 東京都教育委員会、NHK 日本経済新聞社
協 賛	セイコーホールディングス株式会社、プラス株式会社

最後に残るのは命

（原文は英語）

ビバーン・カトゥリア（9 歳）

インド・ハリヤナ州グルガオン市

アミティ・インターナショナル・スクール

2021 年はとても暗い年明けとなりました。僕の祖母がガンと闘っていたからです。今度のガンは神経を侵すガンでした。僕は、両親が祖母の治りようについてとても辛い話をしていたのを覚えています。何度も病院に通う両親や、画像診断や化学りょうほうを受ける祖母のことも。家族全員が心配する一方で、祖母はずっと前向きでした。これまでに二度もガンに打ち勝ったからです。

祖母は、体が弱っている時でも家事をかかしませんでした。痛みで座ることもできなかった日もありました。それでも祖母は、起き上がってバルコニーを見て回りました。そこは祖母の心のよりどころでした。自分が育てた植物を見たとき、祖母の顔が明るくなったのを覚えています。心をこめて育てた植物を祖母がやさしくなでる様子も覚えています。祖母はよく、植物の名前を僕に教えてくれました。僕は、水やりをしたり、枯葉を取り除くのを手伝いました。

祖母は、夕食で残ったパンを捨てるようなことは誰にもさせませんでした。朝になると、そのパンを小さくちぎって鳥の餌にしていました。以前はこれを祖母が全部一人で行っていましたが、体力が落ちてくると、僕が手伝うようになりました。バルコニーではスズメたちが、僕たちが来て餌をくれるのを今か今かと待っていました。時々、餌をあげるのを忘れて、あげるのが遅くなったりすると、スズメたちは高い声で鳴いて大騒ぎをしました。そして、ずっと鳴きやまずに、お腹をすかせて僕たちに餌をせがんでくれました。

2 月の初め、突然すべてが終わりました。祖母が急に亡くなったのです。日に日に病状が良くなっていた祖母は、4 度目の化学りょうほうを受けに病院に行きましたが、帰宅した後に倒れてしまいました。僕たちは皆、祖母のそばにいました。祖母が亡くなるのを見て、僕の胸は張りさけました。これほどの痛みは、それまで一度も経験したことがありませんでした。僕は母に、どうやったら祖母を生き返らせることができるのか、何度も聞きました。助けてくれる医師はいないのかと。それに対して母は、祖母の命は取り戻せないと答えました。母は「死んだら、それで終わりよ」と言いました。これまでにない大きなショックを受けました。



死んだらそれで終わりなののでしょうか。命は、生と死のびみょうなバランスを保っているだけで、いつ傾いてもおかしくないものなののでしょうか。死んだらそれで終わりというのなら、僕たちは何のために生きているのでしょうか。死ぬことが僕たちの終着点だとしたら、僕たちが何かをすることにどんな意味があるのでしょうか。頭の中にそんな疑問がわいてきて、僕は何日間も混乱しました。命なんて無意味だと感じました。皆いつかこの世を去り、僕の両親も友だちも、そして僕自身も、いつかなくなる。僕はとても心細く感じ、祖母のことが恋しくてたまらなくなりました。

2月の終わりのある日、ちょうどお昼ごろのことです。僕はこの時のことをはっきりと覚えています。僕が自分の部屋で本を読んでいると、バルコニーで甲高い鳴き声がしました。バルコニーに出てみると、いつものように数羽のスズメがエサを欲しがって鳴いていました。僕はこの時、もう何日間も誰もスズメにエサをあげていないことに気づきました。植物もしおれてしまって元気がありません。僕はすぐさまスズメにあげるパンを取りに行き、植物に水をあげました。こうして世話をしていると、祖母の近くにいるように感じました。祖母がまだ生きているかのように感じたのです。祖母からエサをもらおうとするこのスズメたちの中に祖母は生きている。大切に育てていた植物の中に祖母は生きている。祖母がやり残した仕事を引き継いだ僕の中に祖母は生きている。祖母自身はそこにはいないかもしれませんが、祖母が残してくれたもの、植物とスズメたちへの祖母の愛情は、僕がそう願うかぎり、ずっとそこに生き続けるでしょう。

僕たちは、自分たちの行動や行いの中に生き続けます。僕には今、それがわかり、そう信じています。僕たちは、自分たちが作り出すもの、自分たちが残す強い印象の中に生き続けます。画家は、その人が描いた絵によって、亡くなってからもずっと人々の記憶に残ります。建築家もそうです。堂々と建つ建物によって、亡くなって何年経っても、僕たちはその建築家を忘れません。マハトマ・ガンジーは、彼が抱いた非暴力と平和の思想の中に生き続けています。僕が大好きな作家、ロアルド・ダールもそうです。彼が考え出した愉快的なキャラクターと素晴らしいストーリーの中に彼は生きています。

僕たちは、永遠に残る思い出を作り出すように努力するべきだと思います。物、思想、芸術、ダンスの振り付け、詩、映画、彫刻、メロディ、庭、建物、本などのように、永久に残るものです。誰かの心の中に決して消えることのない痕跡を残すこと。生きることの目的はそうあるべきではないでしょうか。そうすれば、僕たちは永遠に生き続け、最後に残るのは命だと言えるのだと思います。

大地からの教え：命とは何か、どう生きるべきか

（原文は英語）

ハー・ビック・ドン（24 歳）

ベトナム<カナダ在住>

マニトバ大学

2020 年 9 月。私はレッド川沿いを歩いていた。清々しい秋の空気を吸い、水の流れの音に浸りながら。遠くには、ノーウッド橋の欄干に結ばれた赤いリボンが見えた。リボンは血のように赤く、川岸に並ぶ楓林の紅葉に溶け込んでいた。一本一本のリボンが、行方不明になった、あるいは殺された先住民族の少女や女性を表している。命とは何だろう。数百年前からいまだ止むことなく、先住民族の命が入植者の手によって奪われてきた。入植者たちはさらに、野牛を殺し、森を壊し、大地を汚した。母なる大地や、その大地が創り出した人間を超えた万物の命には、人間の命ほどの価値はないのだろうか。命について、そして人間と自然の関係性について、西洋中心の植民地的な見方をしているうちは、植民地的な慣習に基づく捉え方やあり方を踏襲してしまう。つまり、開発の名の下に環境から搾取するやり方を続けていくことになる。それゆえに、私は大地に目を向けて、命とは何か、どう生きるべきかを学んでいる。



一度、アニシナアベ族の長老に会い、命の意味と目的について大地から学べと教わったことがある。母なる大地は、命は循環していると教えている。人間はこの命の循環の一部であり、森羅万象とつながり合っているのだ。人間同士、そして人間と自然の間に互いを尊重する関係を築いていくという生命観だ。私たちの存在は、大地、水、自分たちが何者であるかという認識、そして歴史が交差する場所に根づいた哲学と切り離すことはできない。

紅葉した楓林に目を向けると、命とは共に共同体を築くことに他ならないと木々が教えてくれた。緑色のコケとオレンジ色のキノコが木の幹に生えている様子を眺めながら、人間の存続は互いの、そして自然との関係にかかっていると改めて思い知らされた。気候危機、ブラック・ライブズ・マター (BLM) 運動、米国でのアジア系アメリカ人に対するヘイトクライム (憎悪犯罪) の最中で、私は黒人や先住民族の人々、有色人種のコミュニティが互いに連帯し、抑圧的なシステムを打破するべく力を合わせる姿を目にしてきた。限りある資源を獲得するために争うのではなく、公平さに欠けた今の社会構造と暴力的な文化を断ち切り、平和な未来を (再) 構築するのだ。

レッド川のほとりにたたずんだとき、命とは過去、現在、未来をつなぐことだと大地は教えてくれた。私はカナダ、ウィニペグに一時滞在しているが、私が住むこの土地は、元々はアニシナアベ、クリー、オジ=クリー、ダコタ、デネ族の人々の土地であり、メティ国の土地だ。この土地は、ヨーロッパの入植者たちが到着する何千年も前からここに住む、先住民族の人々の物語を伝えている。この地では、先住民族の人々が環境と調和して生きてきた。この地では、偏狭な世界観から、白人とその富や権力以外のすべてを軽んじる入植者によって、多くの先住民族と人間以外の命が奪われた。この地では、真実と和解の取り組みが始まり、関係性と平和の構築に向けて地域社会が動き出している。この地には、痛みと心の傷だけではなく、癒しと希望がある。

西洋の教育制度では、生命とは生体内作用を備えた有機体固有の性質であると教える。しかしカナダの先住民族は、土、水、岩、木など人間を超えた万物もまた、霊が宿る生命だと信じている。こうした世界観は、人間と自然の関係性を根本から覆す。私たちが、人間は他を凌ぐ生き物だと捉えるなら、すべての物を人間の発展に役立つ資源と見なすことになるだろう。しかし、私たちが、人間はあらゆる物とつながり合う命の循環の一部であると捉えられれば、あらゆる命と命の多様性を尊重することを学ぶだろう。発展に対する私たちの考え方を、富の蓄積を目指す終わりのないプロセスから、持続的な平和の構築を目指す絶え間ないプロセスへと変えなくてはならない。

確かに、生きることには困難が伴う。そして、矛盾に満ちている。それでも、連帯して立ち上がり、過去の加害を認め、現在の抑圧的な社会構造を打破していこう。これからの世代のために、平和を尊ぶ公平で持続可能な未来を築いていくのは私たちがなのだ。

命とは本当の幸せ

(原文は英語)

チツラ・カルナ (8 歳)

マレーシア・ケダ州スンガイ・プタニ市
リージェント・インターナショナルスクール

命とは何でしょうか。私は 8 歳なので、8 年間しか生きた経験がありません。生まれてから最初の 2 年間のことはほとんど覚えていません。ですから、6 年間と少しの経験から、私にとって命が何であるかという問いに答えたいと思います。

命の意味を最初に考えるようになったのは、海外の幼稚園に入園した時です。私は、その国の言葉を読むことも、その文化を理解することもできませんでした。父が日本で働くことになったので、私たちは芦屋に引っ越すことになりました。私はマレーシアの友達とはなれ、新しい学校に入学しなければなりませんでした。

私にはすべてが初めての経験でした。先生の言っていることが理解できず、どうしてよいかわかりませんでした。とても怖い思いをしました。寂しくて、新しい食べ物も好きにはなれませんでした。マレーシアはいつも暑くて晴れていますが、日本の気候は私には寒すぎました。

とても悲しくて、心が傷つきました。皆が親切にしてくれましたが、マレーシアの家のこと、学校のこと、すべてが恋しくてたまりませんでした。もうこれ以上がまんでできないと思っていたある日、地しんのひなん訓練がありました。本当の地しんではありませんでしたが、実際の緊急じたいの時と同じように大きな音でサイレンが鳴りました。私たちは並んでひなんしなければなりませんでした。何が起きているのかわからなかった私は泣いてしまいました。先生がただの訓練だと言ってくれたのは覚えています。それでも私には理解できませんでした。次の日、私は学校に行きませんでした。

すると両親が私にこう説明してくれました。「どの国もそれぞれに違うもの。マレーシアには自然災害はないけれど、環太平洋火山帯の上にある国々には地しんがあるので、とても危険な場合がある。防災マニュアルを守らない人は、命を落とすこともある」と。

私はこの時、自分にとって命とは何であるかに気づきました。生きていられるだけで幸せであり、運が良いということに。命が私に与えてくれる一瞬一瞬を楽しむのは、なにも生まれた国である必要はありません。生きるとは、変化すること。生きるとは、自分の周りの現実を受け入れて、その違いを大切にすること。生きるとは、学ぶこと。生きてると失敗や迷いもありますが、希望が失われた時にこそ、本当の幸せを見つけることができます。物事は良い方向に変わっていくことができるのです。

その次の日、私は学校に行きました。食べ物に違いはあるかもしれませんが、新しい味に慣れてき

て、その味が好きにさえなりました。日本語の勉強が楽しくなり、新しい友だちと遊ぶのがとても好きになりました。もう寂しくも悲しくもなくなりました。

誰にだって、心がゆれて不安に思う時があります。だからといって、周りにある幸せに感謝する気持ちを忘れてはいけません。地球という船に乗るために、命が与えてくれるチケットは1枚だけです。ですから、どんなに絶望した時も、自分たちに幸せをもたらしてくれるあらゆるものに目を向け、それを大切にしなければいけません。本当の幸せを見つけるために、自分の夢と希望がかなうのを待つことはなく、苦しみが通り過ぎるのを待つこともありません。一瞬一瞬を大切に、周囲の人たちとつながりを持ち続け、どんな状況にあっても本当の幸せを感じる瞬間を見つけなくてはなりません。

歯が抜けると、昔は悲しくて泣いていましたが、今ではそんな瞬間も大切に思うようになりました。歯が抜けたとしても、やがて新しい歯が生えてきます。それはうれしいことです。もちろん、歯が抜ける間は少し痛いこともありますが、その少しの痛みを体験しないと、新しい歯は生えてこないのです。

試験に落ちても、また次のチャンスがある。私は、そうやって希望を持つことで本当の幸せを感じます。そうするしかないから幸せなふりをしているわけではありません。嵐の後には必ず暖かい太陽の光がさすと信じているので、心から幸せを感じます。私にとって命とは、本当の幸せなのです。

命ってなに？

(原文)

中山 諒也 (12 歳)

兵庫県

須磨学園中学校

命とは何でしょうか。そのことを考えたときに真っ先に浮かんだのが、私が生きていることなのだと感じました。命があるからこそ、生きていると感じられると思います。私は毎日、睡眠すること、食べることは、何があっても欠かせません。それができない日があるときと体調を崩したり、病気になったりしてしまいます。

私には、家で飼っている犬と猫がいます。犬は私より年上で、勝手に私のおやつを食べたり、ソファの場所を取り合ったりするライバルです。猫は、子猫の頃に家のベランダで死にかけていたのを家族が病院へ連れて行って無事回復し、飼うようになりました。一緒に寝たり遊んだり、とても大事な家族の一員ですが、人間の平均寿命は約 80 歳、犬猫は長く生きて 20 歳です。私はいつもそのことを考えると胸が苦しくなります。きっと私より先に死んでしまう、お別れするときにいつかきてしまう、そんなことを考えると辛く悲しいのです。犬はもう 17 歳でとても長生きですが、もう目も見えていないし、今年の冬には風邪にかかって病院に連れていくと、死ぬ覚悟をするようにと獣医さんに言われましたが、家族の看病もあって何とか回復してくれました。犬や猫をぎゅっと抱きしめると、私より小さな体から、ドクドクドクと速い鼓動が聞こえます。そんなとき私は命について、みんな平等にあればいいのにと考えたり、できるだけ長く生きてほしいと祈ったりします。

そんな私が好きな食べ物はお肉です。焼肉、すき焼き、焼き鳥、ハンバーグ、ステーキが大好きな私は、動物が大好きです。そんな矛盾に気づいたときがありました。小学校 1 年生のときに行った牧場がきっかけでした。そこには牛や豚が飼われていて、そのお肉でソーセージ作りやバーベキューができました。どれも私が好きな食べ物ばかりで食べずにはられませんでしたが、知らない間に私はたくさん命を食べていました。

私に食べられた命たちは、どう思っているのでしょうか。もし私が食べられる側だったらきっと、私を食べた命で精一杯に生きてほしい、私の命を無駄にしないでほしい、生きている何かの為になるようなことを成し遂げてほしいと思います。命を頂いて生きている私たちの役割は何か、ということをしっかり考えなければならぬと、毎日の食事でするようになりました。

食事が普段考えなかった、生きるということを考えるきっかけになりました。私が今ある命で何ができるのか、また今生きていることの幸せを感じることに、命を粗末にせず大事にしなければならぬ

こと、また自分の命だけでなく周りの命を慈しむことを心掛けたいです。人や動物は寿命があるものの、いつ死ぬかなんてわかりません。毎日流れているニュースではコロナで亡くなられた方の人数が発表される、火事や事故で亡くなる方、遠い国では戦争や紛争で亡くなる方もいます。みんなまだまだ生きていたいと願う人だったのではないかと思います。後悔しないように今ある命と共に思いやって楽しく過ごしていきたいと思いました。

私は将来、どうすれば不幸な人や動物を救い、またどうすれば地球環境が良くなるかを考え、問題を解決できるような人物になりたいと思っています。犬猫の殺処分はどうすれば減るのか、貧困でご飯も食べられないような人にどうすれば手を差し伸べることができるのか。まだまだ勉強不足で答えはできませんが、そんな社会で役に立てるような、またみんなが幸せになれるような発見ができるような人になりたいです。その為に今たくさんのことを勉強していると思うと、課題が多くて辛いときも少し力が出ます。これからも今まで食べた命に対して恥ずかしくない生き方をしたいと思います。私の食べた命が、私の血や細胞になって私を見ているから。

一人ひとりがモザイクのピースに

(原文は英語)

クララ・シマ・アガラジー (14 歳)

カナダ

私が 10 歳の頃、一人の若い女性が自分にとって人生とは何であるかを友人に話しているのを耳にした。不思議なことに、その人のことは今でも昨日のこのように覚えている。アイスクリーム屋の近くにいたその女性は、栗色の髪をしていた。夢中で話をするその女性は、友人に事細かに説明している。自分の話に注意深く耳を傾けている 10 歳の子どもが存在にはまったく気づいていない。その女性は自分の意識の目覚めについて語り、あらゆるものを違った視点から見るようになったこと、自分が地球上に存在する意義が分かったことについて説明していた。まだ 10 歳だった私には、その人の言うことはよく理解できなかったが、その後も忘れることはなかった。けれども思い出すたびにいつも混乱した。

あれから数年が経ち、あの時のことが急に思い出された。あの女性が話していたことを理解できるようになった今、その意見には反対だと感じる。人生は、より高い意識へと上昇するのを待ちながら、盲目的にたどるだけの平たんな道ではない。人生とは、一本道ではなく、進むことのできるルートや進むべきルートが無秩序に、複雑に絡み合ったものだ。正しい選択をすることもあれば、間違った選択をすることもある。私たちの一つ一つの決断が、人生を形づくる道に影響を与える。目覚めや気づきというものは、一晩のうちに起こるものではない。気づかないほどの小さな変化が積み重なり起こるものだ。私たちが何かを読み、描き、聞き、見るたびに、そして何よりも、私たちが誰かの人生と交わるたびに、私たちは目覚めていく。

私は、人生とは、ごちゃごちゃなもので誰もがその意味を理解しようと努力しているのだと思う。しかし、自分たちが正しい方向に進んでいるのか、正しい選択をしているのかは、知るよしもない。正しい結末に向かっているのかさえわからない。私が人生とは何であるかを尋ねてみた人たちの中には、人生は一度きりなのだから、周囲のことなど気にせず、周囲が何と言おうと自分が幸せと思えることならなんでもすると答えた人がいる。私は、この考え方には反対だ。命は一つしかないかもしれないが、私たちは、次の世代の人たちにとってより良い世界をつくるために、その命を生かすべきではないだろうか。

私たちはなぜ、周囲の人たちにどう見られているのかを気にしながら生きているのだろう。私はよくそんな疑問を抱く。実際には、そうした人たちと接する時間はごくわずかで、いずれは忘れてしまう人たちだ。それにもかかわらず、私たちはどうして、周囲の人たちが自分のことをどう思っているのか

をわざわざ気にしなければならないのだろうか。その理由はおそらく、私たちが皆、互いに影響し合う存在であることに何となく気づいているからだろう。私たちは、それぞれの複雑な道をただ歩むのではなく、誰かの人生と絡み合いながら生きている。地球上の人間は皆、出会った人たちに憧れたり、模範としたり、その考え方に倣ったりしながら生きてきた。たとえそれが一瞬のことであってもだ。私たちは、両親や友人、テレビや映画で見た人たちを見習って生きている。アイスクリーム屋のそばで見かけた、あの栗色の髪の女性さえ手本にすることもある。朝起きてベッドを直すのは、両親からそう教わったから。祖父母のレシピどおりに料理するのは、それが一番おいしいと教わったから。友人から聞いたジョークを誰かに話したり、他の人の笑顔を見て微笑み返したりもする。私たちは皆、望むか望まぬいかにかかわらず、互いに影響し合っている。私たちは小さい頃から、一人ひとりが欠点も才能も含めて唯一無二の存在だと言われてきた。しかし、私たちは、それをはるかに超える存在だ。私たちは、これまでに出会った人たち全員が寄せ集まってできた一つのモザイクなのだ。命は、自分だけのものではない。これまでに出会った人たちや、時には思いをはせた人たちと共有しているのだ。私たちは自分のためだけに存在しているのではない。互いに助け合い、愛し合い、この世界をより良くしていくために存在しているのだ。

いつの日か、私たちは皆、忘れ去られる。他の人たちが私たちに対して抱く思い出は、私たちの命がそうであるように、いずれは消えてなくなるだろう。思い出は永遠に続くものではない。しかし、私にとって人生とは、誰かに影響を与えること、その人のモザイクに、唯一無二のピースを残すことだと思う。だからこそ私は、いつでも人に優しくあろうとし、より良い未来のために勉強し努力している。思いをこうして言葉にして書き記しているのもそのためだ。私たちがかつて生きていたという記憶は、時が過ぎれば確実に消えてなくなるだろう。しかし、私たちがこの世界と他の人たちに与えた影響は、決して忘れ去られることはないだろう。

真の生命科学

(原文は英語)

フーティアン・シュー (16 歳)

米国カリフォルニア州プレザントン市

アマドール・バレー高等学校

「生命とは何か」

この難問は、私の高校の生物学の先生が昨年出題した問題です。私たちは当時、教科書通りの回答のリストを与えられたので、それを試験のために覚えておけばよいとしか思っていませんでした。しかし、それから数カ月が過ぎて新型コロナウイルスのパンデミックが私たちに襲いかかり、世界が生と死の狭間に立たされた時、私の頭の中にその回答リストが浮かんで来て、内容を見直す必要を強く感じました。コロナは、生命の意味を単なる生物学の域を超えて掘り下げ、見出すという課題を、自宅にこもるようになった私に課したのです。

人生には、一人の人間を変えてしまう出来事が数多く存在します。私にとっては、コロナがそうです。

パンデミックが発生したことで、外の世界は劇的に変化しました。しかし、私の生活の大事な部分は、これまでと変わらず、落ち着いた生活を送ることができています。私の家族は、自宅にこもる生活を送りながらも、おいしい食事と温かい抱擁で、私をしっかりと支えてくれました。学校では、先生方が残業をして「Zoom」環境に対応してくださり、これまでと同じように有意義な学習体験を得られました。友人たちは、面白いメールやショートメッセージを送ってきては、私をいつも笑わせてくれました。私は、パンデミックが長期化するにつれて、日常生活の中で私を励まし、元気づけてくれるこうした人々すべてに対して、改めて感謝の気持ちを抱くようになりました。

生物学では「生命は、外部環境の絶えまない変化の中で内部環境のバランスを保つ」とあるが、実際には、「生命は、外界のあらゆる混乱とのバランスを保ってくれるもの全てを大切にする」のである。

コロナによる影響は依然として厳しい状況にあります。私が通う高校では、特に新 9 年生<訳注：高校 1 年生のこと>が大変な思いをしています。新 9 年生の友人の一人が、その苦勞を私に告白してくれました。ほとんどのクラスメイトが、Zoom を使用する際にカメラをオフにし、マイクを消音にしたままなので、新しい友だちをつくったり、授業に対するやる気を維持したりするのが非常に難しいそうです。他の生徒にも話を聞いてみると、その多くが同じ問題を抱えているとわかりました。私は、こうした状況を改善するために、上級生と下級生との間でメンタリングを行って新入生をサポートするクラブを立ち上げようと思いました。

生物学では「生命は、ある環境下での新たな刺激に迅速に反応する」とあるが、実際には、「生命は、問題を認識し、それに対して策を講じる」のである。

確かに、私は一人の10代の若者でしかありません。しかし、私は一人ではありません。多くの友人や同級生が私のクラブに次々に参加し、プロジェクトやワークショップのアイデアを何時間もかけて話し合いました。学校の先生やカウンセラー、運営関係者からも多くの方がクラブの立ち上げに手を貸してくれました。周囲の人たちからのこうしたサポートを受けて「AVMentors」は誕生しました。

「AV」は、私たちの学校の名前の略ですが、クラブが第一の目標に掲げている「助けること」を意味する「avail」という単語も表しています。一人の力だけでは大きな変化を起こすことはできないかもしれませんが、そのために、社会には多くの方が存在しているのです。皆が結束すれば、少しずつ変化を起こし、世界を変えることができます。

生物学では「生命は、多くの細胞から成り立つ」とあるが、実際には、「生命は、数多く集まることで強さとなり、支えとなる」のである。

AVMentorsの目的は、中学校と高校との隔たりをなくし、全学年を通じて生徒同士のつながりを強化し、全生徒にしっかりとした学習支援を提供することにあります。クラブを立ち上げてからというもの、オンラインで生徒間の仲間意識を醸成すること、精神衛生とセルフケアを改善すること、アジア人を標的とする昨今のヘイトクライムに対応することに重点を置き、さまざまなイベントを開催してきました。昨年は、私の学区において200人を超える生徒と交流し、支援を提供しました。

生物学では「生命は、エネルギーを代謝し消費する」とあるが、実際には、「生命は、自分と周りの人々に活力を与え、何かに挑戦するエネルギーとやる気を生む」のである。

今年入会する新入生の数が増えるにつれて、上級生の活動に刺激を受け、来年度の9年生のためにメンターになりたいという生徒も増えてきています。私たちは今、より多くの生徒たちを支援するために、国内の他の学校にも活動の場を広げています。上級生が卒業し、新入生が入会するという終わりのないサイクルにより、AVMentorsがこれからも全生徒の情熱と優しさに支えられて存続していくことを、私たちは確信しています。

生物学では「生命は、特性とDNAを次の世代に伝えていく」とあるが、実際には、「優しさこそが生命のDNAであり、その優しさという恩を次に送ることを学習していくのが生命」なのである。

いのちをつくるものとは

(原文)

長谷川 彩華 (17 歳)

東京都

桐朋女子中学校・高等学校

去年から今年にかけて、私は犬を 2 匹飼いだめた。彼らは、野生に生きず、わたしたちの下で、私たちの家族として、人間のような生活をしている。ご飯を与えられ、互いに遊びあったり、歯磨きをしてもらったり、排せつ物を片付けてもらっている。彼らは、私たちや、仲間なしでは生きていけない。

子ども・大人問わず、人間も同じだ。「いや。人間は一人で何でもできるだろう」そう反論したい人もいるかもしれないが、はたしてそうなのだろうか。

日本語には「一匹狼」や「ひとりぼっち」のように、独りでいる人を表す言葉が存在する。しかし、彼らにも家に帰れば家族がいる。たとえない場合でも、ご飯を食べにお店に入れば、「いらっしやいませ」と迎える人、つまり、思いやってくれる人がいる。

「いのち」とは、思われているもの、そして思われ続けられているほど存在しうるものである。私の周りに、思われ続けながら、頑張っている人がいる。私の祖父だ。

私の祖父は、二度死にかけたことがある。二回とも、いのちがもう少ないといわれ、祖母と私の母、そして母の兄弟が呼び出された。コロナ禍であったこともあり、私と妹は病院へ行くことができなかったが、思い続けることはできた。思い続けるうちに、祖父はまだ生き続けているという確信を持つようになった。

確信は、本当だった。それからは、どんどん祖父の容態は良くなり、自力で歩けるようにまで回復した。私は今も、容態が良いままであるように、ずっと祖父のことを思い続けている。

一方で、私が思いやっていると伝えたくても、届かない人たちもいる。例えば、コロンビアで税制改定についての抗議を頑張っている人々や、パレスチナで空爆を受けている人々だ。彼らは、生きることに必死な、周りからの思いやり・応援が必要な、いのちである。直接話すことや、手紙を出すことは難しい。そこで、私は、ネット署名や、寄付をすれば、彼らに届くのではないかと考えた。彼らが、「私たちのことをこんなにも多くの人々が思いやってくれているのだ」と実感してほしいからだ。

このようにして相手を思いやることは、私たちからの一方的な思いやりではない。私が思いやっている祖父は、私のことをいつも褒めてくれる。顔を合わせると、いつも嬉しそうだ。祖父も私のことを思いやってくれている。私が寄付をした団体からは、何に役立てられたのかという説明と一緒に、感謝のメールが届いた。そして私が賛同したオンライン署名も、どんどん実行されて行くと共に、「賛同あ

りがとうございました」というメッセージが送られてきた。相手は私の顔も、どんな人間なのかも知らない。だが、感謝と言う形で、思いやりを示してくれた。私は、知らない人から感謝されることが、こんなに嬉しいとは思っていなかった。私の思いやりは、彼らから私への思いやりでもあった。

思いやることは、個人と個人の間でもできるし、個人と団体の間でもできる。時には、実際に会ったことがない誰かによって思いやられていることさえある。誰のいのちも、家族や友だちに限らず、会ったことのない誰かに思いやられてできている。

しかし、生き物には必ず最後が訪れる。死んでしまったら、いのちはなくなるのだろうか。私たちが思いやっているいのちは、いずれ無くなってしまふのだろうか。私はそうは思わない。「いのち」はなくなってしまうても、誰かがその人のことを思い続けることで「いのち」は存在し続けると思う。思い続けられれば、彼らとの思い出は消えないし、私たちは彼らが生きていたという生き証人になるからだ。

私たちが、「いのちとは互いに思いやることであり、思い続けることは、いのちの消失による悲しみをも軽くする」ということを、心に止めておけば、日頃から周りの人を思いやれるようになり、思いやりにあふれる社会が作れるのではないだろうか。思いやりでいのちを守ることは、平和な世界への第一歩である。

贈り物

(原文は英語)

ラウラ・シルバ・ベルトキ (19 歳)

ブラジル

死神よ、

私はようやく、すべての意味を理解したように思う。つまり、たくさんの人があなたに連れ去られていったことについて。私はあらゆる出来事には起きた理由があると信じている。この謝罪の手紙を書いているのもそのためだ。私とすべての人間からの謝罪である。

私はずっと、世界で唯一完全に自分だけのものであるのが命だと考えてきた。死神よ、私は一体どこで間違ってしまったのだろう。命とは宇宙と自分との間の秘密のようなものであり、命はそれゆえに孤立しているものだと考えていた。結局のところ、人生は続いていき、私たちは一人でそれをくぐり抜けていくのだから。

激しい恋に落ち、その恋を失って浅瀬に飛び込んだとき、私は孤独だと感じた。彼が去った後、自分一人で前へ進んでいった。そうするしかなかったのだ。いつも友だちと笑いあっていた土曜の夜を思い出しながら、私は孤独だと感じた。友だちがみな大学へ進学する前のことだ。私は進学せずに残り、そのまま前へ進んでいった。私の祖父、日曜の午後決まって一緒に映画を観て過ごした祖父が 2 年前の夏に亡くなったとき、私は孤独だと感じた。死神よ、私は泣き叫んだ。絶望した小さな子どものように。さまざまなことがあったが、それでも私は前に進んでいった。

そして、病に侵され肺が半分失われたとき、自分の命は自分だけのものではないと気がついた。なぜなら、たとえ歩いていくのは自分一人であっても、人生は常に変わり続け、影響を受け続けるのだから。人生の小さなピース一つ一つは、誰かによって埋められていき、もはや自分だけのものではなくなる。

そして、私の命はまた、私の母のものでもあるのだと思う。母は毎日電話をかけてきて、体調は良くなったかと尋ねてくれる。私の体調が良くなることはないと思っていた。私の命は父のものでもある。父は電話口で涙をこらえている。あなたが私を連れ去っていく前に、誰も病院に来てさよならを言うことができないからだ。私の命は幼い従弟のものでもある。従弟には、退院したら一緒にかくれんぼをする約束をさせられた。あの子はまだ、私が約束を守れないことを知らない。死神よ。私の命は彼ら皆のものだ。祖父の命が私のものであったように。

けれども、死神よ、命は分かち合うものではない。そうでしょう。私は何もわかっていなくて、そのことに気づくまでに長い時間がかかった。命は私が思うほど孤立したものではないとようやく理解し

たとき、命は自分のものですらないのだと悟った。命は、あなたのものだ。

私は、命は自分のものだと考えていた。誰一人、私から奪うことができない唯一のものだと。しかし、あなたのことを忘れていた。あなたは命を私に貸し与え、そして今、私からそれを取り戻そうとしている。こここのころ、あなたは多くの人を連れ去ってしまった。正直に言うと、私にはその理由が分かった気がする。きっと、私たちがあなたを落胆させたからだろう。私たちは身勝手に欲深く、自分たちの住処を破壊している。しかし死神よ、一番大きな理由は、私たちがあなたの役割を奪ったからだろうと思う。私たちが、死神を代行し、誰に生きる価値があるのかを選んでいくからだろう。私たちは、食料、病気、武器、偏見、金のために、毎日殺し合いをしているのだ。

こういったことを止めるために戦うべきだった。

死神よ、あなたが来た理由はそれだろう。私には分かる、私たち人間は、あなたからの贈り物を受け取るに値しない。なぜなら、命は贈り物だからだ。そうでしょう。一つのプレゼント。一度のチャンス。私たちはそれを無駄にしてきた。命は、私たち人間は幸せを感じ、涙を流し、愛するに足る存在だとあなたが考えたゆえのプレゼントだ。

秩序なく、さまざまな営みや思い出が入り混ざっているのが人生だ。私の人生は、たくさんの思い出に満ちあふれている。初めてのキス、友だちの笑顔、映画の途中ソファで寝てしまった祖父の姿、両親が抱きしめてくれたときの匂い、勝って目を輝かせる従弟の顔見たさにわざと負けたゲーム。その一方で、別れや隔たり、そして死。

人生には、すべてが含まれている。人生はまた、死でもある。死神からの贈り物なのだ。あなたは少し早く、私への贈り物を取り返しにきてだけだ。

最後になるけれど、死神よ、私はあなたからの贈り物に感謝していると伝えたい。そして、愛し、笑い、泣き叫び、生きてきたのと同じぐらいの懸命さで戦ってこなかったことを申し訳なく思う。だから、私自身とすべての人たちから、贈り物を大切にしなかったことを謝りたい。いつの日か私たちに、もう一度チャンスをくれることを願っている。

ありがとう。

まぶしいほどの光

(原文)

塚本 光 (11 歳)

千葉県

八千代市立大和田小学校

私には、生まれて来た時の記憶があります。周りはまぶしいほどにキラキラしていました。そのキラキラは、これから生まれる命や、宇宙の星、星の中に生きている命のかがやきでした。その時私は、別の命とお話をしていました。別の命がだれだったのかは、覚えていません。私達は、命同士が使う言葉で話していました。日本語にするのは難しいけど、言うならば、「君はどんな命として生まれてくるんだい？」と聞かれ、私はどんな存在として、どう生きたいのかを答えました。

私は自分が幸せになるために生まれて来ました。家族が楽しく生きる事も、私の幸せの一つです。そして、家族にいろいろな事を伝えたいという目的もあります。みんなそれぞれ大切な目的を持って生まれてきます。その目的は、人から見てすごいとか、すばらしいと言われるような事とは限りません。

私は、1 年生の時、朝顔を育てました。朝顔ともお話ができるかなと思い、いつも話しかけていました。朝顔はいつも、「ありがとう」と、幸せそうに言っている気がしました。

私の朝顔は、きれいに花がさき、たくさん実ができた後にかれてしまいました。けれども朝顔はかれていく時、幸せそうに笑っていました。だから私は、朝顔にとったら十分満足だったのではないかなと思いました。

3 年生では夏野菜を育てました。私が育てたナスは、花はさいたけれど実ができずに終わってしまいました。本葉が 2 枚出ただけで、小さいうちにかれてしまって泣いていた子もいました。だけど野菜は、自分がと中でかれてしまった事に文句を言っているようには思えませんでした。

例えば芽が出なかった植物は、みんなから見たらと中で終わってしまったように思うかもしれませんが。だけどその植物は、種になる事ができた命なんだと私は思います。朝顔や野菜たちそれぞれの生きる目的が何かは私には分かりません。けれど、どんなに小さくても、生きる期間が短くても、みんな自分の目的を果たしたのではないかなと思います。

人間はつい、命の価値にちがいがあると思いこんでしまうところがあると思います。私も人と比べて自分の方ができていない時や失敗をした時に、自分がダメで、できている子はすごいと思ってしまふことがあります。周りにも、自分なんてと落ち込んでいる人や、逆に人をばかにして笑う子もいます。でも本当は命の価値が変わるなんて事はないんだと思います。その事を忘れてしまった時は、「みんな生きているだけですばらしい命なんだよ」と、自分にもみんなにも、くり返し伝えてあげたいです。

人間や植物だけでなく、動物や大地、海や川などの全ての命も、みんな同じ価値なんだと思います。だれかだけが有利だったり、人間だけが得をすることをつい考えてしまうけど、みんなで気をつけ合っ
て、あらゆる生命が共に暮らせる世界を作れたらいいなと思います。その事をみんなが考える事が
できたら、私が生まれて来る時に見たキラキラを、みんながこの世界でも見られるようになるのでは
ないかと思います。私はきっとできると信じています。だって、もともとみんな、まぶしいほどの光を
放っているのだから。

命の炎

(原文は英語)

ララ・スタンチェバ (11 歳)
北マケドニア・スコピエ市
OOU ラゾ・トリポフスキー

「世界では、食べ物に対する飢えよりも、愛と感謝に対する飢えのほうが大きいのです」

——マザー・テレサ

人生は、決して後戻りすることのできない旅です。私がそれを知っているのは、祖父母がもう戻って来ないからです。長い旅をする人もいれば、生まれてこなかった私の双子のもう一方のように、短い旅をする人もいます。しかし、彼らのことをこの作文に書くことで、今、彼らは生きています。この人生という旅では、美しい場所を訪れることもあれば、廃きよを目にすることもあるでしょう。悪い人間に出会うこともありますが、良い人間にも出会えるにちがいありません。私が、あの心の広いホームレスの男の人に出会ったように。

ある日の午後、学校から帰る途中、小さな公園で一人のホームレスの男の人を見かけました。草の上に座り、硬くなった最後のひとかけらのパンを煮いた指で押しつぶしていました。そのパンくずを周りにまくと、すぐさま数羽のハトが草の上に飛んできました。その人は笑みを浮かべ、友だちのハトが来てくれたので幸せでした。その瞬間、その人はもう独りぼっちではありませんでした。私はカバンの中から食べ物を取り出し、そのホームレスの男の人に渡しました。ですが、彼は受け取りませんでした。そして、花を売っている年老いた女性の方を指さしました。この日から私は、その女性に食べ物をあげるようになりました。

食べ物に困らない人でも、一緒に食べる人がいないと不幸せなこともあります。誰かと何かを分かち合えば、悲しくも寂しくもありません。幸せは、与えられる時だけに感じるものではないのです。

私は、あの男の人に人生とはいったいどのようなものかを書いてもらえたらと思います。そして、彼が何も無い時にも分かち合い、住む場所がない時にも暖かさを感じ、家族がいなくても愛され、お金がなくても必要とされる人生について。

今月、あのハトたちは、毎日その公園にやって来ては友だちの男の人がエサをくれるのを待っていました。ですが、彼は来ませんでした。新型コロナウイルス感染症にかかり、彼の命を救おうと医師が懸命に治療をしていると聞きました。彼は、ウィルスから身を守るマスクを買うお金がありませんでした。

命が何物にも代えがたい贈り物であるならば、裕福な人たちにとっても、貧しい人たちにとっても、命は等しく大切なものです。ですから、地球上のあらゆる生き物の命には尊厳があり、その命は敬わなければなりません。病人にはいやしを、お腹をすかせた人には食べ物を、難民には救いを与えなければいけません。私は、あの心の広いホームレスの男の人の命を、優秀な医師たちが救ってくれることを願っています。友だちのハトが彼を必要としているのですから。私たちは皆、互いを必要としているのです。

私の家の前には若い桑の木があり、その下には大きな木陰ができます。隣近所のお年寄りたちは、この木陰のベンチで一休みをします。素晴らしいのは、その木が私より大きくなったことです。私が3歳だった頃は同じ背丈でした。私たち家族がその木に命を与え、そこに植えて世話をしてきました。

私の家族は裕福ではありませんが、額に入った釣り用の毛ばりをオークションに出し、得たお金をミュンヘンとパリの病院に入院している小児ガンの子どもたちに寄付しました。

私は友人と一緒に小さなマスを川の下流から上流まで運んだことがあります。途中で大きな滝があり、マスがそれを飛び越えることができないからです。服は村の友人にあげます。私のブーツはその子が履いて草原を走り回っています。私のコートはミラが着て、冬を温かく過ごしています。自分には不要なものでも、他の誰かにはとても役に立つことがあります。

鳥にエサをあげれば、歌を歌ってくれます。お年寄りに手を貸してあげれば、知恵を授けてくれます。この世に一つしかない母なる大地を大切にすれば、地球上のあらゆる生き物に永遠の命を授けてくれます。

命とは、未完成の本、まだ語られていない物語です。私の母の優しい声が聞けなくなる時が来たら、私とその命の本を受けつぎ、続きを書き、語ろうと思います。私は、あらゆる生き物の命が決して消えることのない星を、目を開けて夢見ています。命は炎です。人生という旅の目的は、地球というかけがえのない星に暮らす命が続いていくよう力になることです。命の炎を消してはいけません。

おばあちゃんの命

(原文)

湯本 梨里愛 (12 歳)

茨城県

常総学院中学校・高等学校

多くの人が亡くなった戦争が終わり、日本は平成という時代を迎える。平成時代はネットワークが広がり、便利なものが増えた。そして、令和。令和 2 年、私たち、誰もが経験したこともないようなパンデミックが起きる。新型コロナウイルスという憎きウイルスが原因である。そんな世界の中、一つの悲しみをのりこえた一人の少女がいた。彼女は、ある日突然、お母さんにこう告げられた。

「おばあちゃんがね、コロナに感染したんだって」と。少女は、耳を疑った。だって、つい先月に会った時は、すごく元気だったおばあちゃんが感染するなんて。信じられなかったのである。少女は、おばあちゃんの容体を聞いた。するとお母さんは、「重症だって。治るかどうかも、分からないって。だから、私たちも気をつけなくちゃよ?」。重症、治るかどうかも分からない。少女は、お母さんの言葉が信じられなかった。おばあちゃんは、少女が幼いころからよく世話をかけてくれて、よく戦争の話をして、「戦争なんぞしてはならん。あんた、よくお聞き。人の命はな、奪おうとすれば、簡単なんだよ。でもな、一つの命には、お母さんとか、お父さんとか、友だちとか、今まで食べてきた命たちの心が詰まるとるんよ。いい?」。そう言って、耳にたこができるくらい言うのです。おばあちゃん。死んじゃうの。と、心の中で何度も問いかけた。

次の日、お母さんは言った。「もう人工呼吸器の数が足りないから、おばあちゃんがつけているのをはずして、若い人に交換したいって、言ってたよ」と。少女は、ふざけるなと思った。なんで、若い人の命のほうが大切なのか、とも思った。若い人のほうが国や人のためになるからだろうか。命の尊さは平等じゃないのか、とも。

少女はこんなとき、1 つのカードを見つけた。おばあちゃんを書いた臓器提供意思表示カードである。また、こんな手紙もそえてあった。「私が病気になって、治らなかったとしても、人のために死ねるようにしたい」と。おばあちゃんは、どんなことを考えて手紙を書いたのだろうと少女は考えた。本当かどうかは分からないが、「自分の命を最後まで無駄にしたくない」という様に感じとれた。少女は人工呼吸器をおばあちゃんが交代することに向き合った。おばあちゃんならきっと交代する、と断っていたら。後日、おばあちゃんは帰らぬ人となった。

悲しかった。もう、あの優しい声が聞こえなくなるのはさみしかった。おばあちゃんは戦争を経験しているから、人を失うつらさを小さいときから知っていたのかもしれない。命はたったの一つしかな

い。命を失うというのは、もう二度と生きられないということ。未来がないということ。おいしい食べ物を食べられないということ。友だちと、家族と話せないということ。笑えないということ。夢や希望が持てないということ。価値観の違いはあったとしても、命は大切にすべき。そして、命は、赤ちゃんだとしても、若い人も、お年寄りの方も、動物だって、魚だって、虫だって、植物だって、みんな平等に、尊いものであるべき。と少女は感じた。

少女は、おばあちゃんのような病気にかかった人たちを助けたいと考え、医者になると決心した。
ありがとう。おばあちゃん。おばあちゃん分まで、元気に生きるからね。

いのちって何？

(原文は英語)

サイシャ・マヤ・タッポウ (12 歳)
フィジー
インターナショナルスクール・スバ

命は贈り物、命は経験、命は可能性です。

命は贈り物であり、神からの恵みです。なぜなら命は、誰かの役に立ち、世の中のために良いことをするチャンスを私に与えてくれるからです。命は経験です。なぜなら命は、私たちが成長し、素晴らしいことを行い、この世界の本当の姿を知るための場を与えてくれるからです。そして命は、私の中に、そして、この世界に秘められたものを発見する可能性を与えてくれます。

私はまだ 12 歳ですが、命を無駄にしてはいけないことはわかっています。私には生きている間に実現したい夢があります。誰かの役に立つこと、環境を守ること、私の中の真の神性を大切にすること、そして、正しいことのために立ち上がることです。

2019 年、自分の人生が一変する出来事を経験しました。私がいた病院には、私よりも年下の子どもたちが何人か入院していました。皆、心臓に穴が開く先天性の病気を持つ子どもたちです。生き延びるためには、手術を受ける必要があります。医療の介入がなければ、その子どもたちは死んでしまいます。しかし、この地域には手術のできる専門医がいないので、子どもたちもその家族も希望を失っていました。高額な治療を受けるために海外へ行く経済的余裕もありません。ところが、サイ・プレーマ財団という非営利組織が無償で手術をしてくれる専門医を手配してくれたおかげで、子どもたちの命が救われました。彼らは、新しい命の贈り物を授かったのです。

その子どもたちの様子をそばで見ることは、私の人生を一変させる経験でしたが、その子どもたちの両親にしてみれば、それはまさに命の贈り物であったことに私は気づかされました。

私たちは、ふだんからあらゆることを当たり前のように捉えています。水、食べ物、着る物、教育、医療、住まいがあるということは、非常に恵まれたことです。健康な体で幸せに生きられるということは、とてもありがたいことなのです。

良いことであっても悪いことであっても、ささいなことに惑わされてはいけません。命は無駄にしてはいけないのです。

新型コロナウイルス感染症を通じて世界は多くのことを学びました。つい最近まで私たちは、やりたいことがすぐにできる生活をしていましたが、そんなぜいたくな暮らしのほとんどが今は奪われてしまいました。

私たちは、感染症を通じて命の贈り物の大切さを学びました。個人も社会も国も、あるいは世界も、自分たちのことだけを考えるべきではないことも学びました。地球上の人間は皆互いに結ばれていて、世界全体が一つにならなければいけません。大切なのは、愛情、思いやり、感謝する心です。感謝する姿勢があれば、前向きな力が広がり、世界中で生命をいきいきと生かす動きに弾みがつくのではないのでしょうか。

こうしたことは口先だけであってはいけないことに私は気づきました。ならば、そうした前向きな力を世界に広げていくために、私はどうすればよいのでしょうか。それは、私なりのやり方で恩返しすることだと思います。一人の人間がすべてを実行することはできませんが、誰でも何か一つは実行することができます。私なら、病気の子どもたちを助けたい。心臓病が子どもたちに与えた苦しみや、特にその両親に与えた精神的痛みを目の当たりにした私は、貧しい子どもたちの苦しみを和らげるために、医師になり、小児循環器の専門医になりたいと思っています。これと同時に、子どもと動物の権利の改善にも取り組んでいきたいと思っています。

私は、何かを証明するには、ただそれを夢見たり口にしたりするのではなく、行動で示すことを両親から教わりました。

4年前、私は母にならってベジタリアンになろうと決意しました。すべての人間と生き物に、生きて呼吸をし、幸せになるチャンスが与えられるべきだと思うからです。私たち人間のニーズと欲求を満たすために、素晴らしい動物たちの命を奪うことはしたくありません。人間にも環境にも優しく、持続可能な植物由来の代替食品が数多くあるのですから。

誰もが一体感、思いやり、感謝の心を持つようになれば、この世から戦争がなくなり、世界は平和で満たされるでしょう。世界は存続し、生命を大切にできるようになるでしょう。こうした変化の風が吹き始めれば、生命をいきいきと生かす動きが自然と広がっていくのではないのでしょうか。

命は贈り物、命は経験、命は可能性なのです。

与えるために生きる

(原文は英語)

マハシュリ・ランジット・クマール (13 歳)
インド・タミル・ナードゥ州コインバトール市
インド・パブリックスクール

私はかつて、ある人を知っていた。私が尊敬する人物であり、私のメンターであり一番の親友だった。その人は私の「タータ」。タミール語で「祖父」の呼び方だ。一緒にいるだけで人生がとても充実しているように感じた。私が細かいことにこだわったりする時はいつも、人生では誰もが欲しいものすべてを手に入れられるわけではないのだから、たとえ小さなことであっても、それを大切に、楽しむようにと私を促してくれた。タータはいつも、児童養護施設や高齢者施設でボランティアをしていた。タータは皆の手本だった。もちろん私にとってもそうだ。彼のすることには皆が感動した。「生きることは、与えることだよ」とタータはいつも言っていた。幸せ、愛情、平和、調和、そしてあらゆる形の前向きな力を広めていくことにこそ生きる意味があるとタータは信じ、周りを助けることによってそれを実践していた。彼のこういった努力は、若い私の目にはまったく新しい世界を切り開いていた。

ある春の朝、花で満開の庭を一緒に見ようと私はタータの部屋に急いだ。タータはベッドに横たわり、息をしていなかった。私は、世界の終わりのような気がした。空が曇り、家の中は死んだようだった。その日、唯一覚えているのは、私の大切な人たちの悲しみに暮れた顔とたくさんの涙だ。タータがいなくなって初めて、人の命の本当の大切さに私は気づいた。

タータのことを思うと、いつも決まって私の心の中に彼の声が響いてくる。「ただそこに生きているだけではいけないよ。有意義な人生を送るんだ」。タータの言葉を思い出すたびに、私には疑問に思うことがあった。「授業に出席し、家族や友だちに対する義理を果たして忙しく生活することが生きることなんだろうか」。私は、有意義な人生を送らず、ただそこに生きていただけなのかもしれない。若い人たちは皆、こうした疑問に直面するものなのだろうか。ストレスを感じ、道に迷い、空しさを覚えながら、それでも前に進むことが生きることなのだろうか。こうした疑問を抱いたことがきっかけで、私は「YOUunity」という小さな活動を立ち上げた。友人を何人か集め、未来を担う世代が有意義な人生を送れるように若者の生活を豊かにすることについて、私の考えを聞いてもらった。年配の方々に指導してもらい、ストレスを解消するための活動、食品衛生に関する活動、環境に優しい地域づくりを開始した。私たちは、この取り組みを通じて、より良い人間になるために互いを高め合い、地域貢献もした。あらゆる生命に明るい未来を約束するために、私たち若者がその一役を担うことができるの

は嬉しいことだ。

このところのパンデミックがきっかけとなって多くの若者が命の大切さに気づき、誰かに手を差し伸べるようになった。YOUUnity の活動を通じてそうするようになった若者もいる。私たちは、地元の農家を支援するために地元産の作物を購入し、高齢者や障がいのある人たちを支援した。地域で資金集めの活動も開始した。私たちがこうした活動をしているうちに、この地球も、騒がしい毎日に煩わされることがなくなり、再び活力を取り戻し始めた。鳥は鳴き、木々は揺れ、動物たちは自由を満喫している。こうして生き物たちが仲良く平和に生きる様を目にして私は嬉しくなった。母なる自然は、害さず、傷つけず、守りさえすれば、あらゆる生命は自ずと元気を取り戻すことを私たちは学ぶべきかもしれない。私の周りで多くの人たちが命を落としている今、自分や他の命の意義と尊さに、そして、一瞬一瞬がどんなにかけがえのない恵みであるかに、私は気づいた。

私には今、わかったことがある。私たちの人生は、最大の旅であり、壮大な冒険であり、またそれ以上に、何物にも代えがたい贈り物であるということだ。人生の素晴らしさとは、私たち一人一人が自分自身の人生の意義と目的を探求することにある。それがどんなに壮大であろうが、平凡であろうが。私が見つけた私自身の人生の意義とは、人生そのものに「意義を与えること」だ。ただ単に生存し、生き延び、そこに生きていることではない。人生の意義を探求し、見出し、その人生を生きることだ。

人生とは、簡単に言えば旅だ。人間は、人生という旅を生き、人生に意義を与えなければならない。ただ単に生存するだけではいけない。私はタータに心から感謝している。銀色の髪と黄金の心を持っていた彼に。人生の真の意義を探求するように私の背中を押してくれた彼に。誰かの人生に良い影響を与えるように私を導く言葉をかけてくれた彼に。私自身にとって、あらゆる生命の役に立ち、その助けとなってこそ、人生の真の意義を全うできるのだ。そうすることが、生きるためのエネルギーとなり、目的となり、原動力となる。アルバート・アインシュタインの有名な言葉にこうある。「誰かの為に生きる人生にこそ、人生の価値がある」。

いのちって何？

(原文)

二反田 優 (16 歳)

鹿児島県

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校

「いのちって何？」をテーマに、自分の思いをつづる。この大きな問いかけに、僕は二つの出来事を思い出した。

一つ目は初めて葬儀に参加した時のことだ。幼い頃から、僕たち兄弟を自分の孫のように可愛がってくれたおじさんが、去年亡くなった。もともと華奢な体格のおじさんだったが、癌を患って以来、おじさんはみるみる痩せていった。お見舞いに行くたび、おじさんは小さくなっていった。僕はその姿を見るのが少し怖かった。体調が悪くとも、それを一切僕らに見せることなく、いつも笑顔で迎えてくれる優しく強い人だった。最期まで病と闘いぬいたおじさんの体は、ガリガリに痩せて、燃え尽きたマッチ箱のように棺の中で眠っていた。

田舎に暮らすおじさんは、夏休みには僕らをよく海に連れて行ってしてくれた。藪を分け入り、自分しか知らない穴場のスポットで僕らに釣りを教えてくれた。お正月やお盆にはごちそうを用意して、いつも笑顔で僕ら家族を待っていてくれた。葬儀中、読経を聞きながら、おじさんと共に過ごした楽しい時間を思い出した。出棺の際、棺桶で眠るおじさんの周りに花をたむけた。多くの方がお別れの際に、頬に触れて涙を流していた。でも僕はおじさんの亡きがらに触れることができなかった。おじさんの死を、温度で感じる事が怖くてできなかった。おじさんの体を覆っている、恐ろしい何かに触れるような気がして躊躇したのだ。大好きだったおじさんに、ちゃんとお別れが言えないような自分自身に失望した。誰にも言えない気まずい思いを心に隠しながら、僕はおじさんにお別れをした。

二つ目は自分の出生に関する思い出だ。僕ら兄弟は三つ子として生まれた。自分だけ、出生時の体重が 1500 グラムしかなかった。胎内で上手く栄養が取れなかった僕は、身体のいろんな発達が未熟だったらしい。自分が小学生の低学年の頃に、母が新生児センター内の保育器で眠る僕の写真を見せてくれたことがあった。僕の体に手を添える母の手と比べても、自分の体がものすごく小さなことが分かる。鼻からは赤と黄色の細いチューブが伸びており、手や足の甲からも細いチューブが機材につながっていた。それらのチューブで胃に直接栄養を送っていたのだと聞かされた。写真の中の生まれたばかりの自分は、シワシワで弾力がない灰色がかかった肌色だった。これらのチューブが外されたら、今にも消えてしまいそうな命に見えた。自分の命が、か細く頼りないものだった事実を突きつけられたような気がした。自分が不幸で哀れな赤ちゃんだったように思えて、僕はわんわんと声を出して泣い

たことを覚えている。

諸行無常ということばがある。この世のすべての物は移り変わり、一瞬として同じ状態にとどまっ
てはいない、という自然の真理を説いた言葉だ。生あるものはいつか必ず滅びる。花の美しさも永遠で
はない。だからこそ今、目の前の美しさに価値がある。このことを4文字に込めた言葉だ。命は儚く、
だからこそ美しいのだ。

今、自分は健康で、自分のすぐそばに「死」を感じる状態ではない。だが、おじさんの命、生まれた
ばかりの自分の命。この二つの出来事は自分に、「今」を楽しみながら丁寧に生きる大切さを教えてく
れた。それはきっと、「いのちって何？」というテーマの答えにも重なるものかもしれない。いつか終
わりの来る自分の人生は、「今」の連続の先にあるのだから。

自らが想像する死とは、暗闇の世界だ。だが、その暗闇があるからこそ、命もまた輝きを増すのだと
思う。限りある命だからこそ、かけがえのない「今」を大切に輝いて生きる。力強い光が、今、自分の
心の中に生まれたような気がした。

イモムシの変容

(原文は英語)

ダン・ジョセフ・タレ・ディオ (17 歳)
フィリピン・カビテ州ダスマリニヤス市
ニュー・エラ高等学校

あなたは、人生がまったく理不尽なものに思える経験したことがあるだろうか。肩の荷が重すぎて耐えきれないと思うような。何年もの間、私は真っ暗な場所で自分を見失い、人生の目的と意味を探し続けていた。自分を哀れみ、自らの光を見つけられなかった。学業がもたらすあらゆるプレッシャーに耐え、次々に押し寄せる不安を何とかやり過ごし、何度も心が折れながら、行く先の見えない十代を過ごしてきた。すべては私の幼い心によるものだ。ただ彷徨っているようで、感じることはできたのは苦悩の痛みだけだった。

それは 2018 年、私たちの州では夏休みだった。フィリピンのビサヤ諸島東部のレイテ島で、こうした私の観念が徐々に崩れ始めた。島へ行くことには大きなためらいがあったが、自分の人生とそれを照らす光が見つかるかもしれないという望みに賭けて、旅行に参加することにした。長い移動の末、1900 年代半ばに建てられた古い木造の家に着いた。家は、いかにも不気味な雰囲気にも包まれていた。

日の出と日没が何回も過ぎ去っていった。もし 1 匹のイモムシに出会わなければ、私の人生は今も同じだっただろう。イモムシは裏庭の茂みの小さなグアバの木で元気よくムシャムシャと葉を食い荒らしていた。私には新しくやる事ができた。それは、イモムシがチョウになるまでにどれくらいかかるのかと思いを巡らすことだった。イモムシは日ごとに大きくなっていくように見えた。しかし、すぐにチョウになれるはずなのに、なぜ段階を経なくてはならないのか、私にはその理由が解せなかった。そして、待ち望んでいた時がやってきた。サナギを見つけたのだ。何日かが過ぎ、さらに数日を重ね、私はだんだん苛立ってきた。ただ時間を無駄にしているように思えた。その真の姿を目撃するまで、本当に長い時間がかかったが、初めてチョウの体が現れ、魅了されるほど美しい羽が初めてはばたくのを見たとき、すべてが報われた。思いも寄らず、私はこの変容の中に、人生の意味を見出していたのだ。あのイモムシは、私の光だ。イモムシは、人生のさまざまな段階や困難を這うようにして進んでいった末に、輝き飛び立っていけるのだということを知ってくれた。今なら理解できる。私には自分のタイミングがあり、いつか自分の人生でチョウになるのだ。

人生について発見し始めた頃、夏休みは終わりを迎えようとしていた。太陽が輝き、天気は暖かく、草原は波のように揺れて私に別れを告げているように見えた。家に帰ることが嬉しかった。自分の人生と光を見つけるという旅の前の希望が叶ったのだ。私はもう自分を哀れんだりしない。それは、自分

の人生がようやく本当の始まりを告げた瞬間であり、長い旅の始まりに過ぎなかった。

私は、今から5年後に生物学者になると決めている。最近はとりわけ教育が不確実な状況にあるが、それでも私は、熱心に学び、世界の環境問題の解決に携わりたいと願っている。今はまだ、この地球に暮らす平凡な若者だが、それでもこの星の生命に影響を与えることができる。実際に、友達の何人かに向けて、使い捨てプラスチックを減らし、もっと持続可能な製品や代替品に切り替えることについて情報を伝えることを始めた。自然は私が人生を見つける手伝いをしてくれた。今度は、自然がその命を永らえさせるのを私が手助けする番だ。これが、私の目標であり、戦いであり、人生であり、最後まで実践し続けるつもりだ。

今いる地点から、もっと素晴らしく、持続可能で平和な世界が見える。この星のすべての命が一つの使命に向かって団結し、協力し、自然を変えるのではなく、共に自然保護を広げていくことで可能な世界だ。こうした連帯を通じて、私たちは、未来の世代の生きる権利、この世界の驚くべき生の営みを見届ける彼らの権利を守ることができるのだ。

3年が過ぎた今も、私の人生を大きく変えてくれた小さな生き物に心から感謝している。気力を失ったと感じているすべての人に私の光を分け与え、人生を取り戻す助けになれるなら、これほど嬉しいことはない。

いのちって何？

(原文は英語)

ネティミ・イシャーラ・フェルナンド (18 歳)

スリランカ

命とは、自らの存在であり、自らの体験であり、生きようとする自らの意思である。私の両親がよく口にする古き良き時代には、生きることは歓迎すべきことであり素晴らしいことだった。しかし、2021 年の今日、生きることは辛く苦しい。今にも命が消えてしまいそうだ。技術は進歩し、私たちは努力を重ね、あらゆることをしてきたにも関わらず、生きることは楽になっていない。危険と紙一重だ。

私たち人間は、授かった命を当たり前のごとく捉えて生きてきた。そして今、私たちはその報いを受けている。しかし、特定の何か一つにその全責任を負わせることはできない。なぜなら、木々を切り倒し、水を汚染し、海亀を殺し、産業活動で放出された有毒ガスによって地球温暖化を招いたのは、私たち人間だからだ。私がこの作文を書き、意識改革を訴える最中も、生命は生存を賭けて闘っている。

私たちは、限界まで生命から搾取し続けてきた。今、そのツケが回ってきたのだ。高等生物として食物連鎖の頂点に立つ私たちは、自分たちを無敵の存在だと考えてきた。だが、かろうじて生きている微細な細胞のかけらが、まさに私たちの目の前で数多くの命を奪っている。私たちは、あらゆるものを犠牲にしてテクノロジーを発展させてきたが、肝心の今になって何の役にも立たない。警戒状態の生活が始まって 2 年になるが、こうした状況はもはや非日常ではなく、日常の一部となってしまった。こんなことであってはならない。タダで命を授かったからといって、それを当たり前のことと思っはいけないのだ。

命とは何か。私にとってそれは、この地球だ。私たちのふるさとであり、私たちが暮らす星であり、私たちの責任で守っていかなければならないものだ。もし地球が存在しなければ、生命は存在しないだろう。その地球が今、私たち人間の行動が招いた恐ろしい事態によって苦しめられている。しかし、すでに手遅れということはない。しっかりと声を上げさえすれば、私たちの生命はまだ救うことができる。人々の意識を向上させ、行動を起こさなければならない。なぜなら、私たちが率先して行動しない限り、変化は起こらないからだ。さあ、手袋を持ってビーチの清掃をしよう。リデュース・リユース・リサイクルを実行しよう。使い捨てプラスチックを生分解性のある素材に置き換え、私たちの生命であるこの地球を存続させよう。温室効果ガス排出量を削減し、化石燃料の使用を止めよう。持続可能な未来に投資し、知識を深め、水素燃料車やバイオディーゼルの、よりスマートなテクノロジーの開発に取り組もう。太陽光、風力、水力を利用しよう。こうした永続的に再利用可能な資源を当たり前ものと思わず、汚染することなく活用していこう。私たちには選択肢がある。しかし、こうしたことに進ん

で投資し、知識を深めようとする人がいない。このままでは、ふるさとと呼べる場所が、私たちの生命が失われる可能性がある。移り住み、次に荒らす別の星を調査することよりも、今現在私たちが住んでいる星を救うことのほうに多額の資金を費やそうではないか。勝算がないと決まったわけではないのだ。北極や南極のシロクマやペンギン、そして、その地域の海面上昇に関心がない人たちは、せめて自分自身のことや自分の子どもの未来について考えてみよう。5~10年後には、自分自身や自分の子どもの生命が失われているかもしれない。生活するだけで精一杯な人たちに、火星に移り住むという選択肢はないことは、誰もがわかっていることだ。私たちが声を上げない限り、生命はやがて終わりを迎え、地球も死に絶える。

こうした言葉から伝わる私の声は小さいだろう。しかし、700語以内に制限されたこの作文が、ページの枠を越えて、何かしらの影響を及ぼすことを私は期待している。グレタ・トゥーンベリが声を上げ、巨大な意識改革の波を起こすことができるのなら、私たちも同じように立ち上がり、抗議するだけでなく、実際に変化を起こすこともできるはずだ。命は大切だ。だからこそ地球が大切なのだ。生命を生かすためには、持続可能な未来が必要だ。私たちが今営んでいる生命に感謝し、それを守ってほしい。生命は救う価値のあるものだ。今こそ行動しよう。地球は、私たちの命なのだから。

幸せな最期のために

(原文は英語)

プリンス・ビショゴ・バシヤンゲジ (20 歳)

コンゴ民主共和国<エスワティニ在住>

南部アフリカ・ユナイテッド・ワールド大学ウォーターフォード・カマラバ校

私たちが「普通ではない」生き方を避ける限り、この地球上で本当に生きたことにはならないだろう。呼吸やあらゆる生命プロセスも虚しいままだろう。それは、生物学上の生命に加えて、真の意味での生命を全うするという大仕事をやり遂げない生き方である。

生きることは、目標を持つことだ。目標は、生命に生きる価値を与えてくれる。この世における価値の創造を実現してくれる。目標は、人生を導くコンパスだ。人間は誰しも、死ぬまでの間に、生まれてきた世界をより良いものに変えていく責務を担っている。もし今日、すべての人が必ずしもその責務を果たしていないのであれば、その原因は、目標をもって生きておらず、本当の意味で生きていないからだ。彼らは、生まれ、成長し、地球の資源を使い、「人生を謳歌」し、死ぬ。これは生きていることにはならない。ただ危害を加えているだけだ。目標を持って生きること、闘うべきもの、命をかけたものを得ることができる。許せない問題や欠陥が明確になる。母なる地球をより良くするために大きな力がほしいと思わせるもの、それが生きることである。

私個人としてはいつも、この地球上で神聖な責務を担っていると感じている。その責務とは、この世界が私にもたらしてくれるものを消費するだけではない。この世界をより良くするために寄与することも私の責務だ。もし何の遺産も残すことなく死ぬことになれば、私は深く後悔するだろう。それでは生きたことにはならないからだ。この世界に危害を加えるためだけに生まれてきたことになる。地球上で費やした時間とそこに存在していたことを悔やむにちがいない。なぜなら、私自身の神聖な責務を全うしていないからだ。

2015 年、民族紛争で家族全員を失ったことは、私が生き続ける理由を失うことにつながった。家族は、私にとって生きるための原動力であり、幸せの源だったからだ。私は生き続けなければならなかった——意義を持って。そこで、毎日を明るく照らしてくれるものは何か、生き続けなければならぬと感じさせてくれるものは何かを振り返ってみた。それは、大小を問わず誰かの助けとなることだった。私は、自分の人生に意義を見出した。有意義な人生を送るということは、なにも幸せであることばかりではない。幸せかどうかは、自分がどれだけのものを持ち、手に入れるかによって決まることが多い。必死になって幸せを手に入れようとする一見魅力的なこの一連の過程は、たいていの場合、自分たちやそれ以外の生命に悪影響を及ぼす。有意義な人生とは、むしろ、自分が誰かにどれだけのものを与

え、もたらすかということではないか。私は悟ることで、その意義を見出した。

さらに、人生の意義は帰属意識を持つことによっても得られることに気づいた。人や自然との繋がりがそうだ。この帰属意識はこれまで、家族の中だけに見出されてきた。もっと何か大きなものから得たものではないので、簡単に失いやすい。誰かと繋がるということは、その人を感じることだ。自然と繋がるということも、それを感じ、それまで見逃されてきた自然の持つ力を知り、生かすことだ。聖典の間違った解釈によって、私たちが豊かな自然の一部であると考えることが禁じられてきた。その結果、自然と繋がるためのあらゆる慣習を、私たちは聖者にあるまじき行為と呼んでいる。そして、人間として私たちが肉体的・精神的な潜在能力を十分に開花させて生きるために母なる大地が与えてくれる力とエネルギーを、否定するよう強要されてきた。私たちは活力を奪われている。

私たちは今、自分たちの生命の安全を脆弱させ、生活水準を後退させる、破滅的で組織的な抑圧が蔓延した社会で生きている。地球上の生命を思いやり、より良くしていくためには、何よりもまず自分自身のアイデンティティ、強さと弱さ、価値を知らなければならない。自分自身を理解していなければ、他の誰かに影響を与えることなど決してできない。その次に、私は自分のコミュニティを理解することに努めたい。これは主に、技能や才能といった目には見えない財産、資源、問題事項を理解することだ。

居心地の良い領域から抜け出して変化を起こすこと、周囲に影響を与える生き方をするために自身に秘められた能力を十分に探求することは、私たちの世代のスローガンになっている。しかし、実際にこれを達成するのは僅かな人たちだ。人の権利を奪うこれまで通りの生き方（学校、就職、そして、あるいは起業）と違う生き方を追求する者はほとんどいない。学校で決められた教育課程にはないことを学ぼうとする者はほとんどいない。見ることを禁じられているものを見ようとし、聞くことを禁じられているものを聞こうとする者はほとんどいない。学校教育を終えても学び続ける者はほとんどいない。仮に教育課程が存在しなければ何を学びたいかを考え、それを学ぶことに魅力を見出そうとする者はほとんどいない。生きることの魅力とは、従来形にはとらわれない、主流派とは言えない生き方にあるのだ。

生きること

(原文は英語)

テシル・プジメル・ジヌ (21 歳)

アラブ首長国連邦<インド在住>

多くの疑問は、時が経つにつれてその答えが見つかるものだ。しかし、問い直すたびに新たな側面を露わにし、永遠に答えの見つからない疑問もある。数年前、私はそのような疑問を自分自身に問うことを余儀なくされた。ある日、適当に選んだ動画をいくつか見ていると、そのうちの一本に自分でも理解しがたい感覚を覚えた。ある男性が自分の住む町のあちらこちらで物乞い人に話しかけるという内容だ。私は、その男性と一人の物乞い人とのやりとりに衝撃を受けた。男性が声をかけた物乞い人は、実際には若い男の人だった。男性がその若者に挨拶をすると、若者も笑顔で挨拶を返してきた。二人は地下道に座って話を始めた。若者はカメラで撮影されるのを気にしなかった。彼は児童養護施設で育ったことを打ち明け、大人になると地下道を住みかとするようになったと言う。通りすがりの人たちの中には食べ物をお恵んでくれる人もいる。これが彼の生活だ。

しかし、自分でも理解しがたい力で胸が引き裂かれる思いがしたのは、彼の話の内容ではない。話しかけた男性がその場を去ろうとすると、若者はもう少し一緒に居てくれと男性に迫ったのだ。若者は悲しげに「寂しい」と言った。そして、もう少し一緒にいてもらおうと、男性に食べ物を差し出したのだ。男性はとても驚き、それをもらってしまったら、彼の食べ物が直ぐになくなってしまったと言った。すると若者は、食べ物をくれる人はいつでもいるが、自分に話しかけるために足を止めてくれる人はいないと言った。若者はとても優しく礼儀正しいが、精神的に深く落ち込み孤独であることが私には見て取れた。しばらくすると、男性は若者に別れを告げ、別の場所の物乞い人と話をするためにその場を立ち去った。動画を見終わった私は放心状態だった。それから数分後、私はこらえきれなくなって泣き始めた、自分でも驚くほどに。思い返してみると、私の心を深く傷つけたのは、あの若者が孤独で落ち込んでいたことだけではない。大きく発展させたと私たちが誇らしげに主張する世界は今や、物乞いをする人でさえ食べ物を差し出して話し相手を探そうとする状況にあるということだ。物乞い人が自分の食べ物と引き換えに、ほんの少しの愛情と関心を示してもらおうとすることが、ショック以外の何ものでもなかった。私の心を突き刺したのは、この辛い現実だった。私はこうして「生きることは何か」を自分に問わざるを得なくなった。

生きることは、人間関係や家族・友人との大切な時間を犠牲にして、進歩し発展することをいうのか。

生きることは、自分の人生がいかに有意義であるべきかを語り、自分自身と大切な人たちだけを

満足させるために夢を実現することをいうのか。

生きることとは、ただ難民キャンプに物資を供給し、それをメディアや新聞記事で自慢げに語ることをいうのか。

生きることとは、ただ自分を宣伝するために数品寄付して、支援を受ける人々と一緒に写真撮影し、その一方で彼らの自尊心を傷つけ、世間の目の前で彼らのイメージを損なうことをいうのか。

生きることとは、奉仕することだ。自分以外の人々が、単なる数字ではなく、かけがえのない生身の人間として真に生きていることを実感できるように奉仕することだ。「重荷になっている」「自分たちの世話が大きな負担になっている」と決して思わせることなく、彼らに奉仕することだ。依存心を抱かせ、精神的・感情的な縛りを与えるのは奉仕ではない。あなたが手を貸し持ち上げた人が、今度は他の誰かに対して、上から目線にならずに同じことができるように、そして、人間として生きることの本当の意義を実感できるようにするのが奉仕だ。助けになろうとすると同時に、その人の尊厳を守るように注意を払い、無私無欲に生きることこそ、私たちが手本とすべき生き方なのではないか。マザー・テレサがそうしたように。義務ではなく、名誉と思って奉仕することこそ、生きることなのだ。